

に死者があつて寺へもつてゆくということを直接、経験しているのである。

③ 人が死んだ時どう思いますか。「かわいそう」というのが男児に三〇％あるが、この場合も多分に成人からの影響があつて、幼児自身の感じから真にかわいそうと思う場合は少ないのではなからうか。「だいきらい」とか「死なない」とか「中にはおもしろい」というのさえあつて、死はいやなものであるとは考えているが幼児の本心から、かわいそうと同情の気持を起すことは特例の子ども以外には殆んどないということもできる。

④ おとむらい(葬式)を見たらどう思いますか。

「わからない」が殆んどで、その無関心状態を示している。

以上の調査を綜合して考えても、幼児は「死」ということについては成人のように、死即センチチというような考え方を持っていないということがわかる。

次に童話についての調査をやつてみた。即ち「七匹の小山羊と狼」の話を年長組幼児についてアンケートを求めて見た。

① このお話をきいて狼をどう考えますか。

殆んどの幼児が「死んだ方がいい」と答えている。かわいそうだと答えた子どもは一人もいない。

② なぜですか(その理由)

「こわいから」というのが七〇パーセントで多分に、おそろしい即ち悪いという意味を含んでいるのである。ここでも、悪いことをした者は当然死の酬を受けるべきであるという解釈である。

結論 ① 幼児は「死」ということに対して成人が抱いているような、センチメンタルな感じを持っていないということがわかった。従つて、童話の中で悪いものが「死」ぬということに対して、憐憫

の情などは、わかさない。

② 童話の中で悪いものが亡びるということは当然の結果と考へてゐる。ただ話す場合の死の表現についての扱い方は、簡単に扱わなければならない。特に絵による表現の場合(紙芝居やスライド)には構図については特に注意しなければならない。

③ 童話の場合あまり成人の考へで取扱われないことが肝要である。

④ ことに世界の名作や、昔話などについては一個人の考へでむやみに筋を変えたり改作したりすることは避けなければならない。

(大会発表論文抄録48—50頁)

子どもの実在性について

熊野大神宮幼稚園 青井正子

目的 実在性とは、人間の思考の産物である夢や物の名前等のような非実在物を、自分の外に客観的に存在する物質である、と見なす子ども特有の思考形態のことである。ピアジェはジュネーブの子ども達を対象に実在性の調査をおこなつた結果、社会的な経験を積むに従つて実在性は消失すると述べている。本実験はピアジェの実験方法に準じて幼児・学童を対象に実在性の有無を明らかにし、その消失過程を發達的に検討すること、ピアジェの研究結果と比較すること、とを目的とする。方法は抄録を参照されたい。

結論 (1) 最初に実在性が消失するのは名の起源におけるものであつた。物の創造と命名とを区別するようになる年齢は8・9才頃である。(2) これと前後して消失するのは夢におけるものであり夢を内的なものとするようになるのは9才頃である。したがつて内的な

ものとの外的なものとの区別において著しい発達を遂げるのは3年生である。(3)思考を心的なものと考え物的なものではないと答えられるようになるのは10・11才頃である。しかし物質性を残しながらも一応思考を頭に定位出来るようになるのは、1年生である。(4)名の場所に関する実験結果はピアジェの結果と大きな差異を示した。彼によると9才頃に名の場所における実在性が消失すると言うが、本実験では10・11才でも半数の者しか名の場所を頭に定位出来なかった。(5)名の論理的な実在性が消失し、名の記号性を真に理解するようになるのは11才以後であり、これは子どもにとって一番困難なことであった。(6)名の起源を神に求めようとするものは少数であり、これもピアジェの結果と異なる点である。(大会発表論文抄録69・71頁)

幼児における指の定位

大阪釋陸女子大学児童研究所

大西憲明・布川延子

森田潤子・野尻とし子

目的 指を用いて、種々の遊びを指導することは多く、例えば指の命名、数え方、指を用いて事物を指摘させるなどがある。さらに、指を刺激するとか、特定の運動をさせることによって、その反応の正確水準や運動の巧拙度を通して大脳中枢機制的発達を推定する試みも多くなされている。ここでは、これらの基礎的知見の一端を得ようとした。

方法 四―六才の幼児群に、机の上に両手を、手のひらを上に置いて置かせ、どれかの指を実験者が刺激し、その刺圧された指と同じ指を、両手をあげた姿で描かれた指のうちから選択して指示させ

た。この場合、一方の手の中指を、また小指と人さし指を、さらに両手の薬指と人さし指を刺激して再生的に指示させた。

この場合、開眼と閉眼の両条件の下に実施し、さらに手のひらを上にしても、同様な条件で実験を試みた。

以上の結果からは、正確に反応した率からいえば、年齢が進むほど正反応が上昇し、男女の性差は認められない。また刺激数の増加に伴って正反応が減少するし、手のひらの上下では有意差がない。閉眼よりも開眼の場合に正反応の定位が多いのもいうまでもない。

次にこのような再生的に定位させる指の絵の代りに、赤丸の紙を紙の水平線上に並列させ、この系列のうちから同様な条件下で指摘させた場合には、有意に正反応率が低下した。つまり、刺激された指を、再生的に定位づけるにしても、その定位する絵が、手の具体的な絵とはちがって、抽象的な赤丸系列の配列では、正確にその場所を指摘することがより困難であった。即ち、刺激された特定の指の所在は明らかに意識されても、定位し指摘すべき課題が等質な赤丸の配置では、分化が乏しく、これと対応させることがむずかしい。従って、再生させる定位図形自体の体制化に依存しているといえる。

結語と考察 指を用いて、このうちのどれかを客観的にその所在を定位して指示する能力は、四―六才の間で著しく発達する。しかし、指示させる対象が、具象的でない場合には、その対象自体の構造の抽象性のために認知・弁別の困難を伴ない、正確さを低下させる。幼稚園で、数の観念を養うために直接的に指を使用させることが、これを間接的になんらかの事物に移調させて、数の観念の発達を計るにしても、その移調させる事物の特質の具体性、親近性、配置のなされかたには、十分の考慮が払われなければならないであろう。

(大会発表論文抄録1―3頁)